

江戸東京博物館友の会会報

目次

“誰もが知っている隅田川”再発見の展覧会	1	えど友プラザ「幸田文の隅田川」	7
友の会セミナー「江戸下町=ベネチアコピー説」	2	「葛飾北斎と谷文晁と三代目尾上菊五郎について」	7
友の会セミナー「徳川家の婚姻政策(後編)」	3	「日本髪について」	8
特別観覧会「大昆虫博」	4	「一度は八王子城へ」	9
江戸博クリップ「Exile On Main Street」	4	「会員が選ぶ東京新百景」応募総数 559 点(74 名)	9
見学会『江戸四宿を歩く』品川宿—その1	5	落語で江戸散歩…[16] [崇徳院]	10
えど友サークルだより / 会議・会合日誌	6	催事案内 / 会員優待のお知らせ	11~12

“誰もが知っている隅田川”再発見の展覧会

—特別展「隅田川～江戸が愛した風景～」企画担当の我妻直美学芸員に聞く—

—隅田川といいますと、あまりにもありきたりで地味で、いまさらなぜ、という感じを抱いてしまうのですが…。我妻—確かに、隅田川は江戸博の近くにあり、大変平凡な存在です。ですが、近ければ近いほど江戸博として一度はきちんと取り組まねばならないだろうという考えがあります。8年ほど前になりますが、江戸博で『隅田川をめぐるくらしと文化』という調査報告書を出しました。内容は、隅田川に関して歴史、民俗、考古、美術史などの学芸員の報告を集めたきわめて学際的なもので、いずれは隅田川の展覧会をやらなくてはという意識がありました。

—チラシによりますと、160点を超える作品が展示されるそうですね。

我妻—実は隅田川はあまりにも身近過ぎ、誰でも知っているため、大きな展覧会になりそこなっているようです。隅田川の絵は、江戸博を含め各種展覧会の沢山の絵の中で、ああここに、あそこにも、という状態で見られる程度です。従いまして、これだけ広い展示面積を持つところが、敢えて160点以上の隅田川だけの作品を取り上げ

るのはおそらく初めてではないでしょうか。なかには常設展でご覧になった作品があったり、よその展覧会で見た作品もあると思いますが、こうして「隅田川」というひとづくりの中で多くを見ることは初めての体験だろうと思います。それから、もうひとつのポイントは、160点以上の作品のうち、そ



▲我妻直美学芸員

の8割近くが館蔵品である、ということです。最近、海外から大量の浮世絵などをお借りした展覧会が続いておりましたが、では15年以上の歴史を積み重ねてきた江戸博はいったい何を持っているのか、きちんと館蔵品を展示することも館の責務だろうと考えています。初めて展示される館蔵品もあ

りますし、またつい最近収集した屏風絵などもありますので、充分堪能できるのではないかでしょうか。

—作品の時代の幅はいかがですか？

我妻—江戸時代のはやいところから近代—明治、大正、昭和までです。江戸時代前期の屏風絵から始まり、江戸時代のものを中心に、明治、大正、昭和と少数ですが展示します。残念なことに、明治時代の銅版画や錦絵は展覧会に出るチャンスがあまりありませんし、また、江戸から近代を通覧する展覧会も多くありません。せっかく隅田川の館蔵品があるので、今回はそれらの近代作品も展示いたします。

—つまり、江戸時代から明治、大正、昭和を通じて、隅田川に関する美術品を隈なく見られる、ということですね。どうもありがとうございました。

(この展覧会の展示室近くの壁面に、皆さまからの写真コンテスト入賞作品が「平成の隅田川」として展示されるそうです。お楽しみに。会期：9月22日～11月14日)

【聞き手】文・写真：広報部会・福島信一

きっかけ

私が所属しております「江戸連」仲間の日本橋の老舗「伊場仙」十四代目から「江戸下町はベネチアをモデルにしているという説があるのですが、検証してみない?」と言われたのがきっかけです。最初は信じられずまったくの荒唐無稽と思いましたが、これが検証を進めるうちにそうでもないかもしれませんと思われてきました。ベネチアの知識、地図を見た可能性、江戸の下町づくりとのタイミングという家康とベネチアとの接点を巡る3点を検証ポイントとし、作業を開始しました。ベネチアの歴史・江戸の町作りの歴史等さまざまな文献を項目別に整理し、年表と対比する作業をすると、「ベネチアコピー説」が案外説得力をもってきただので不思議です。

謎を解く鍵が潜むキーワード

その過程から6つのキーワードが浮上してきたので、順にご説明します。

①「水の都」：伝説上のベネチアの建国は421年とありますが、実際には810年に水の都＝ベネチアが誕生しました。その際の軟弱地盤における基礎工事や建築手法は、江戸時代の埋め立て技術とまったく同じです。またこれはアムステルダムの建築手法も同様です。鈴木理生によると、「江戸は日本人の社会がはじめて臨海低地に意識的・継続的に都市を造った場所であり、海を埋め立てて海上に進出した場所だった」そうです。ベネチアは800年前、アムステルダムは300年前にこうした事業を実施しており、江戸の建築技術と大変似ている点は興味深いところです。

②オルテリウスの「世界の舞台」：16世紀後半オランダやベルギーの出版社から最新の画期的な地図が出版され始めます。なかでも1570年に出たオルテリウスの「世界の舞台」は大航海時代の成果を反映し一冊にまとめた近代地図の先駆となる画期的な世界地図でした。また同時期には近代地図学開始期の金字塔的存在となるブラウン&ホーヘンベルクの「世界都市図帳」

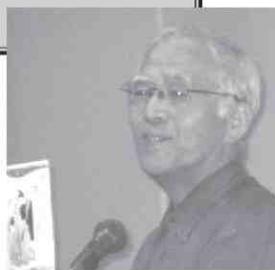
「江戸下町＝ベネチアコピー説」

講師

圓山
稔さん

(NPO法人
江戸連事務局長)

第94回 江戸東京博物館友の会セミナー
(2010・6・26)



が出版され、ベネチアやアムステルダムを含む450余りの世界都市がとりあげられ紹介されました。

③天正遣欧使節：ご存じのとおり、1543年ポルトガル人の種子島漂着から西洋と日本との交流の歴史が始まりました。1581年にはイエズス会東インド巡察使パリニヤーノが来日し、日本の文化・風習に順応した布教政策を展開。信長は14年間に30回以上も宣教師との歓談機会をもち、地球儀を前に最新の地理学を知り、異国の物珍しい話を聞いたといいます。1582年には天正使節団として4人の少年がヨーロッパに派遣され、彼らはローマ教皇やスペイン・ポルトガル王との謁見後、多くの貴重な土産を持ちかえりますが、その中には上記「世界の舞台」と「世界都市図帳」が含まれており、家康が目にしていた可能性があります。

④「リーフデ号」の日本漂着：その後1600年にオランダの東インド貿易船「リーフデ号」が大分臼杵に漂着。家康はウィリアム・アダムズらを引見し「貿易と布教をセットにしないことに好感をもち、貿易顧問として活用しました。砲術の名手であるヤン・ヨーステンも召し抱えられ、「八重洲」という地名を残したほどです。彼ら青い目の家来からベネチアを含むヨーロッパの情報を十分に知り得たと思われます。

⑤「天下普請」：江戸の町づくりは3段階に分けられますが、特に本格的な工事は2段階目で、1603年から1616年にあたります。日比谷入江の埋め立て事業が開始されたときは、家康がベネチアの地図や情報に出会った時期より後であり、タイミングとしても十分間に合ったのではないでしょうか。

⑥「万国絵図屏風」：天正遣欧使節が戻ってきてから江戸ではローマから持参した精巧な肖像画・ヨーロッパ絵画の模写がはやりました。その一つとして世界都市図屏風がいくつか残されています。「万国絵図屏風」はその一つで現在は宮内庁三の丸尚蔵館に所蔵されている巨大な八曲一双の屏風ですが、そこには世界の28の都市図があります。ベネチアやアムステルダムも描かれて、記録では1611年家康が駿府城で南蛮世界図屏風を見たとされ、この屏風の製作に深く係わっている可能性があるのです。

ベネチアかアムステルダムか

こうした作業の結果、ベネチアは海の中にあり陸につながっていない、一方、アムステルダムは江戸同様、陸の延長であること、ヤン・ヨーステンらオランダ人達と家康との接点を考慮し、実は、私は、アムステルダム説が本当なのではないかと考えるに至りました。

ベネチアかアムステルダムか。しかし、結局それよりも、江戸は膨大な世界の情報が入ってきた時代だったということを指摘したいと思います。

【記録】文・写真：広報部会 深尾恵美子



「徳川家の婚姻政策（後編）」

講師 山本博文さん

（東京大学大学院情報学環教授・史料編纂所教授・文学博士）

天英院の強い希望と竹姫の遺言

強い発言力を持った將軍の正室天英院（六代家宣正室）は実家近衛家と婚姻関係を重ねている島津家を「其の御家（島津家）の御事は、一位様（天英院）にもつねづね御大せつに覺しめし候」と、竹姫（八代吉宗養女）と島津継豊の結婚を「…御うけ仰せ上げられ候様にとひとへにたのみ覺しめし候」と強く希望しました。島津家も「…御奉公之儀、御子孫御為にも候間、御請御申しなされ候様に」と対応しました。ここに新しい徳川家と島津家の関係が成立しました。婚姻によって家と家とのつながりができると、この関係が疎遠にならないように、何代にもわたって婚姻関係を重ねることが大名の間で行われていました。徳川家と島津家の間でもその後一橋宗尹（吉宗三男）娘保姫と重豪（継豊の孫）が結婚し、続いて一橋治済（保姫の兄）の子豊千代と重豪の子茂姫の縁組が茂姫3歳の時に決まりました。

6年後、天明元（1781）年豊千代（のちの家斉）が十代家治の養君となりました。島津家の姫君茂姫は一橋家の御廉中ではなく、徳川家の御台所として教育されるために、同年9歳で一橋屋形、西の丸に入りました。老中の中には、大名島津家から徳川家の御台所が出ることに反対する意見もありましたが、島津重豪はこの縁組は竹姫（八代吉宗養女）が遺言に残したことであると強く主張しました。近衛家の養女寛子となり寛政元（1789）年十一代家斉の御台所として婚姻しました。

十三代家定の正室

家定の正室鷹司有君が嘉永元（1848）年、一条秀子が嘉永3（1850）年に死去し、正室がない状態になりました。大奥には御台所が必要と広大院（十一代家斉正室島津寛子）付だつた比丘尼から島津家年寄に内々に「…

大隅守并ニ私娘年比之もの御座候や、…」と打診がありました。その後も大奥から「京都の方は御好ニも在らせられず、広大院様（寛子）御例めてたく在らせられ候に付き」と広大院の血筋（島津家の娘）を正室に迎えたいと望まれ、島津斉彬も「広大院様御在世とも違ひ、此比は何となく御遠々しく相成り申し候…」と疎遠になっていた徳川家との関係を元に戻したいと島津家の娘を嫁がせることにしました。

嘉永6（1853）年島津斉彬の実子として「丈夫届け」が出された篤姫（今泉島津家一子）は安政3（1856）年21歳で十三代家定33歳の正室となりました。「御間柄も宜しく、此上は御誕生を待ち奉り候との事、大奥専ら申し居り候」と夫婦仲もよかったです。次期將軍（養君）を一橋慶喜にと運動している一橋派の島津斉彬からの上申書には、家定は「猶また薩摩守までかよふに申し出し、新御殿もあるに、上をあなたり候様成る事と思し召し、いかゞ致し候心かときつうへ御はら立」と大変怒りました。しかし、家定は「あまり御好みがございませぬから、御泊りが遠うございました。月に二度あつたり一度あつたり、よほど遠いのでございます。中薦（お志賀）も、たつた一人、お気にいったのがございました」という状態だったようです。

將軍繼嗣問題も家定が「彦根をさしあいて越前を大老にするなどできない」と安政5（1858）年4月に井伊直弼を大老に選んだことにより、6月に紀州藩主徳川慶福（のちの家茂）が將軍繼嗣に決まりました。7月には十三代家定が死去し、十四代家茂が將軍となりました。9月より大老井伊直弼による安政の大獄が始まりましたが、安政7（1860）年3月3日桜田門外の変により井伊直弼が殺される事件が起こり、幕府の強権的なやり方が潰えて、

朝廷と幕府の一体化を図って反対派を抑えようと、孝明天皇の妹和宮を家茂の正室に迎える話が持ち上がり、七代家継の八十宮（靈元天皇姫宮）の先例を以って文久2（1862）年に降嫁が実現されました。和宮入輿にあたって、大奥風と御所風の違いから篤姫と和宮の対立がいろいろあったようで、和宮付の庭田嗣子は「重荷にて實に々々々心配々々申し尽くしがたく候」と嘆息ついています。慶応2（1866）年京で家茂が脚氣衝心で急死したので、慶喜が十五代將軍となりました。

篤姫と和宮の覚悟

慶応4（1868）年鳥羽伏見の戦いの後、京より慶喜が逃げ帰った時に天璋院（十三代家定正室篤姫）を薩摩に還す案がありましたが、天璋院は「何の罪があって、里にお還しになるか、一步でも、コヽはでません、もし無理にお出しになれば自害する…」と大奥を動こうとしませんでした。官軍が江戸へ攻めてくるのに対して、天璋院は官軍隊長へ「…当家の土となり…当家安全を祈り候外御座なく…」と手紙を送り、西郷隆盛へも「…徳川御家之為を思い尽力致すべき旨、御談じ相成り候…」と徳川家の為に尽力しています。和宮もその時に官軍の有栖川宮等に「徳川家の存続だけは許してほしい」と手紙を送っています。朝廷と薩摩藩から嫁いできた二人が、徳川將軍家の最終的な家の存続という難局にあたつて実際に力となつた事は確かです。特に、島津家から入った篤姫が幕末の政治の上で大きな働きをしたその前提には、家宣以降の將軍と正室の近しい関係、家族として成立していることが「温恭院（家定）…面目も無之」という手紙のことばにも示されているように思います。

【記録】文：広報部会 佐藤美代子
写真：同 原盛年

江戸東京博物館友の会特別観覧会

(2010/6/25)

特別展「大昆虫博

～日本人と虫たちの深い長い歴史～



6月22日(火)～9月5日(日)まで開催の特別展「大昆虫博」の特別観覧会が、6月25日17時から開催されました。いまから4億年前に誕生した昆虫が環境の変化に適応しながら、現在、約100万種が確認され、今でも、毎年数千種以上が発見されているといいます。日本は南北に長い地形と温暖多湿な気候から虫が多く虫を身近に感じながら生活してきました。今回は、そんな古くから続く日本人と虫たちの関係を3人の「虫の達人」養老孟司、奥本大三郎、池田清彦各氏をナビゲーターに、貴重な昆虫の標本類をはじめ写真や映像、歴史資料などで紹介して

います。そして、これらの資料などを通して昆虫が私たちの生活や文化と深い関係を持ってきたことが分かります。今回の特別展は「虫を知るといろんなことがわかる!! 虫と触れあい楽しむだけじゃない新しいスタイルの昆虫展！」と位置づけられています。

最初に1階映像ホールに集合。松原会長から本日の予定の案内があり、橋本由起子学芸員の紹介を受けました。橋本学芸員から簡単な紹介があり、ただちに、昆虫展会場へ移動。まず、会場入口で彫刻家・中嶋大道氏の作による大きさ4.5m重さ600kgのステンレス虫「トノサマバッタ」を見学。「昆虫」ゾーンへと進みます。ゾーンは1～10までありすべて「昆虫」の世界となっています。まず、はじめに「日本人と虫」として四季のさまざまな虫とのかかわりが紹介されます。虫の鳴く声にしばし聞き入ります。また、古の武将たちがトンボやカマキリ（後に退かない習性が勝ち戦につながる）の意匠を頂いたという2体の甲冑などがあり、時代を超えて虫とのかかわりを感じます。また、学んで遊ぼうコーナーで、やくみつる氏の東京の「昆虫」も興味深いです。次のコーナーでは、ナビゲーターとして登場した3人の虫好きオヤジ（養老孟司、奥本大三郎、

池田清彦）と題した部屋があり、それぞれうんちくを語っています。続く大昆虫フィールドでは、現存する日本最古の昆虫専門博物館“名和昆虫博物館”的大型標本箱による標本類が展示され、圧巻でした。世界の「カブトムシ・クワガタムシ」が黄金色・玉虫色などに見事に光り輝いています。また、美を競う豪華な色彩を誇る「トリバネアゲハ」など美麗なチョウたち、まさに「空飛ぶ宝石」であり、ムシできない神秘さも感じました。その他、「珍虫・奇虫世界の変わりものたち」もあり、まさに大昆虫フィールドでした。その後、3D映像で珍しい「昆虫」を楽しみ、それらの解説を受け、後は各自で会場を回りました。

特に、世界のカブトムシのコーナーでは最大で屈指の造形美を誇るオオカブト属・飛ぶ宝石たちなどに感嘆の声が上がりました。標本の前では、あまりの美しさと不思議さに、しばし、声も出ないほどでした。こどもの頃憧れた「昆虫」の世界がそこにありました。歴史や人物像とは違う、生命や自然界につながる感動がありました。

【取材】文：広報部会・今野君江
写真：同・福島信一

「Exile On Main Street」

2010年サッカーワールドカップ南アフリカ大会。イングランド×ドイツ戦T V中継で、観客席の中にミック・ジャガーが映った。予期せぬ映像に驚いたが、アメリカ×ガーナ戦ではクリントン米国元大統領と一緒に観戦していたと聞いてさらに驚いた。ミック・ジャガー。言うまでもなく、英国ロックバンドの大御所、ローリング・ストーンズ（以下、ストーンズ）のボーカリスト。私事、昨年「シャイン・ア・ライト」という映画（彼らの2006年ニューヨークライブのドキュメンタリー）を見たときもクリントン元大統領が出ていてびっくりしたものだが、それ以来の付き合いか。そう言えばブ

レア英國元首相もファンだと聞いたことがある。ストーンズは1963年にビートルズのライバル的位置づけでデビュー、2010年の今なお現役（もうすぐ50周年！）。私が聴きはじめた1970年代すでに王者の貫禄をそなえていたが、そのイメージは不良・反体制的で、（スキャンダルを除けば）とても大統領や首相と結びつくものではなかった。時は流れて、評価は変わり、何しろミック・ジャガーは2003年に英国でナイトを叙勲されている。

私は図書資料に携わる仕事をしているが、何かこのことと本の収集のことを重ねて考えてしまった。出たばかりで評価が定まらない本も、10年後、

司書

栗原智久

100年後に重要な資料となり得る。そういう思いから、本を博物館の資料として収集する。

とはいって、「評価」というのは難しい。大統領や首相に支持されたからOKということではないし、大勢に支持されるからというのもちがう気がするし…。

ストーンズっぽいと言われ、かつて日本武道館を超満員にした日本のバンドのあの人は、今はひとり、100人規模のライブハウスでも演じる。私はそれを見に行く。おっと、もう長いのでこのくらいでやめておこう。

◆このコラムは江戸博の学芸員や講師、司書など館職員の方に執筆をお願いしています。

『江戸四宿を歩く』品川宿一その1 天候に恵まれ北品川を歩く

旧東海道を進む

今年度初回の見学会は以前にも実施して好評だった『江戸四宿を歩く』の品川宿一その1です。梅雨のさなかの見学会でしたが、さいわい一日中曇り空で強い日差しあなく、約180名の会員が14班に分かれて無事3時間のコースを歩ききました。

品川高輪口を出て八ッ山橋に向かい、橋を渡った旧東海道入り口でこれからのコースの説明を聞きます。ここからしばらくは歩行人足を置くことを条件に旅籠営業を許可された歩行新宿と呼ばれるところを歩きます。現在は北品川商店街として整備されています。間もなく「徳川実記」にも記載されているという沢庵和尚と三代將軍家光の問答に由來した問答河岸です。説明を聞くと問答というよりは馴熟落の応酬のようで笑えました。幕末の志士達がたまり場としていた相模屋という旅籠跡に、土蔵相模跡の解説板があります。桜田門外の変に参加した水戸浪士も前日ここで気勢を上げたとか。商店街の進行方向左側の細い横丁の奥には海が見えていたはずですが、いまは家屋の建ち並ぶ姿のみで、品川の海が広がる風景を想像するのはかなり難しいです。

商店街を少しはずれ、左に入つて利田神社へ向かいます。ここはかつての目黒川の河口の突端で漁師町の守護神である弁財天をまつっているため、洲崎弁天とも呼ばれています。品川沖に昔は鯨が迷い込んだものらしく、將軍家斉までもが見物に来たという由来を書いた鯨塚があります。さらに左に進

むと台場小学校があり、校門前に御殿山下砲台跡の碑が建っています。幕末、品川沖に造られた台場の中で唯一陸続きの砲台でしたが、いまは小学校の一隅に模型が展示されているだけのようです。

寄木神社で錫絵を特別拝観

砲台下から法禅寺へ。浄土宗、芝増上寺の末寺のこの寺には天保の飢饉で流浪し品川宿にたどり着いて死んだ人々を葬った由来を書いた流民叢塚碑があり、古い板碑が大切に建物の中で保管されています。また商店街にもどり、虚空蔵横丁を入って養願寺をお参りしてから一心寺へ向かいます。ここは成田不動をまつっているため品川不動とも呼ばれ、江戸三十三観音の一つ。そこから南東方向に向かうと今は聖跡公園となっている品川宿本陣跡へ着きます。往時をしのばせるものは品川宿本陣の図面を記したプレートしかありません。



▲荏原神社で茅の輪くぐり

次に向かった寄木神社も品川の漁師たちの鎮守です。本殿は石を積み上げた土蔵作りのめずらしい神社で、この土蔵の扉の内側に伊豆の長八の錫絵「天鉗女命功績図」が描かれています。特別に見せていただきました。

目黒川沿いに西に向かうと荏原神社に出ます。ここは南品川の鎮守様。銅製の豪華な賽銭箱に、美しい狛犬。本殿の両脇からは龍が首を伸ばして、天水桶に雨水が落ちる仕掛けになっています。夏越の祓いで茅の輪が鳥居にしつらえられ、皆さん8の字くぐりしてお参り。



▲品川神社の富士塚を登る

元薩摩藩の抱屋敷にあった稼穡稻荷神社の樹齢500年という大イチョウを見てから細川家墓所へ向かいます。近世の大名家墓所の葬制を知る上で重要な文化財ということですが、さしもの大大名家も、護貞さんのお墓を見ると現在建てる庶民のものときほど変わらないようです。

東海禅寺から品川神社へ

次は東海禅寺へと向かいます。この寺は万松山と号する臨済宗大徳寺の末寺で、將軍家光の命により沢庵のために創建されました。官営品川硝子製造所跡の脇の細い坂道を上ると東海寺大山墓地の入り口です。ここには沢庵和尚、賀茂真淵、鉄道の父・井上勝など、著名人のお墓があります。

いよいよ最後の見学地となる品川神社に向かいます。昇り龍、下り龍の鳥居がめずらしいですね。石段をのぼり、途中左手にはいると富士塚です。こんなに立派な富士塚が残っているとは知りませんでした。明治2(1869)年に造られたとありますが、当時の頂上からはさぞや絶景であったことでしょう。

この神社拝殿裏手になぜか板垣退助墓所があります。不思議に思うと実は東海寺末寺の高源院というお寺にあつたのが、寺が関東大震災でくずれ鳥山に引っ越したため、ここに取り残されてしまったということでした。

細長い品川宿の北品川地区のコースはここでおしまいです。「品川宿一その2」をお楽しみに。

【記録】文・写真：広報部会・中村貞子



▲鯨塚のモニュメント

◎活動概況

- ◆江戸東京を巡る会：7月20日(火)「大名屋敷跡と名刹を訪ねて～港区編2」というテーマで、東京メトロ「麻布十番」駅から鍋島藩菩提寺・賢宗寺、善福寺(アメリカ公使館跡)、曹溪寺(寺坂吉右衛門墓所)、南部美濃守下屋敷跡(有栖川宮記念公園)、光林寺(ヒュースケン墓所)、祥雲寺(黒田長政墓所)などをめぐった。参加者32名。
- ◆落語と講談を楽しむ会：6月22日(火)月番・伊東敏男さん(協力・山内啓巳さん)が、東京水辺ラインとタイアップした企画「落語であそぶ、隅田川クルーズ」に参加。両国から明石町まで、落語ゆかりの地のガイドを聞きながら船旅のあと、明石町区民館で山内啓巳さんの落語「野ざらし」を聞き、新阪急ホテル32階のレストランで懐石料理を賞味した。参加者21名。7月27日(火)月番の武田夏男さんによる「納涼！新作落語三昧」で、五代目春風亭柳昇の「結婚式風景」、五代目古今亭今輔の「お婆さん三代姿」など懐かしい新作落語をDVDやCDで鑑賞。参加者18名。
- ◆藩史研究会：6月11日(金)大渡真司さんが明石藩について、藩主・藩政の歴史をはじめ、新田開発の松平信行やたばこ生産奨励の松平直明など名君の紹介、万葉集や源氏物語にからむ地理・歴史の興味深い話など内容の濃い研究発表を行った。参加者は27名。7月9日(金)国定美津子さんが越中国富山藩に関し、「木曾義仲と越中」の中世から「富山壳薬のしくみ」にまでおよぶ、詳細な研究発表を行った。特に発表者ご本人の先祖につながる話題では、熱気あふれる解説があった。参加者は26名。
- ◆古文書で『八丈実記』を読む会：6月10日(木)、6月25日(金)、7月8日(木)、7月23日(金)に例会を開催。参加者は各8、9、10、10名。

◆役員会

- 6月10日(木)17時開催。総会の総括、10周年記念事業進捗報告、各部会の活動状況の確認をした。出席者13名。
- 7月8日(木)17時開催。10周年記念事業各計画の進行状況、町方書上げの本年度事業計画の報告があった。出席者13名。

◆事業部会

- 6月3日(木)17時開催。総会の反省、5月事業報告、今後の事業計画を確認。えど友研究発表会の申込者と選考案につき報告があった。出席者19名。
- 7月1日(木)17時開催。6月の事業報告、及び今後の事業計画を決定。古文書に親しむ特別講演会、隅田川観覧

◆神田川を歩き楽しむ会：6月24日(木)、27日(日)に第8回として、井の頭線「浜田山」駅から成園橋へ出て和田堀橋まで善福寺川に沿って歩いた。途中、松ノ木遺跡・古代住居跡、大宮八幡宮、杉並郷土博物館、堀之内熊野神社などに寄り参拝・見学を行った。中でも大宮八幡宮では神職の、郷土博物館では学芸員の詳しい説明を受けた。参加者は各39、31名。7月25日(日)、29日(木)に第9回として、東京メトロ「東高円寺」駅から、蚕糸の森公園、妙法寺などを見学したあと和田堀橋へ出て、和田廣橋まで善福寺川に沿って歩き、神田川との合流点に達し、以後(中野)新橋まで神田川に沿って歩いた。途中、立正佼成会発祥地を見学、本郷氷川神社などに寄り参拝した。参加者は各28、44名。なお、29日は強風雨のため神田川は富士見橋で打ち切った。両日とも新宿で暑氣払い懇親会を行った。

◆『江戸名所図会』輪読会：6月21日(月)清水昌絵さんの担当で、武蔵(徳川氏入府前)を読み、みんなで話合った。参加者は17名。7月19日(月)清水昌絵さんの担当で吹上御庭から八見橋まで、高野裕子さんの担当で日本橋から蘿が渕までを読み、活発な討議を行った。参加者は16名。



●各サークルとも引き続きメンバーを募集しています。奮ってご参加ください。参加ご希望の方は、はがきに①サークル名、②会員番号、③氏名をご記入の上、友の会事務局へお申込みください。また新しいサークルの立ち上げ希望の方は友の会事務局へお問い合わせください。

申込・問合せ先 130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局 Tel.03-3626-9910

会議・会合日誌

2010 / 6 ~ 2010 / 7

会等の進捗報告があった。出席者19名。

◆広報部会

6月18日(金)14時開催。『えど友』56号の校正作業の確認、『えど友』57号のスケジュール、取材担当の確認を行った。出席者12名。

7月16日(金)14時開催。『えど友』57号の入稿スケジュール、58号以降の取材予定と担当者の確認、「会員が選ぶ東京新百景」の作業状況の確認等

を行った。出席者12名。

◆総務部会

6月30日(水)13時開催。『えど友』56号の発送業務、次号の日程確認、記念事業提案に関し確認。出席者20名。

7月28日(水)13時開催。次号の発送業務及び記念事業作業の確認、記念事業オリジナルバック等の封入作業を行った。出席者15名。

◆文政町方書上翻刻 プロジェクト

6月3日(木)、17日(木)、7月1日(木)、15日(木)A、Bグループとも例会開催。出席者は(A)各9名、10名、9名、9名、(B)各9名、10名、10名、10名。

幸田文の隅田川

手 島 義 之

小説『流れる』『おとうと』で知られる小説家・随筆家幸田文は墨田区向島で生まれ、20年近くを過ごした(明治37(1904)年～大正13(1924)年)。父は明治大正期の文豪幸田露伴である。かつての府下南葛飾郡向島は隅田川のほとりといつてもよい所で、そこに育った幸田文は隅田川をこよなく愛し、心の故郷とした。隅田川についての随筆が数多くあり、折に触れて隅田川の流れを語り、水の思い出を記している。

「川べりに三度も住んだが、改めて思えば私は、川のことを殆ど知らない。ただ川の水はからだの芯へしみこんでいるようだ。だからあんなに汚れて臭くとも、あの川をいとしく思う」(川すじの思い…ふるさと隅田川所収 ちくま文庫 2001 初出朝日新聞 1965.3.1)。

川べりの三度とは、はじめは言問よりすこし川上の土手下、まだ村だった寺島に生きて二十歳まで、明治の末から大正震災まで住んだ。

二度目は、寺島を去って暫くして結婚した先が新川の酒問屋だった。三度目は、戦後永代より上の両国橋の近くに、ほんの何ヵ月かいた。

隅田川は明治43(1910)年に洪水で氾濫、明治45(1912)年にも氾濫した。昭和3(1928)年に結婚し、翌年女児を出産した。後年の青木玉である。

「隅田川のそばに私は二十一歳まで住んでいたから、川のいろんな顔つきを少しほ見て知っている。…秋のあらしのあとは赤濁りになって、川が腹を立てている。…それを吾妻橋の上からこわごわ、しかし立ち去れずに見ていたのだが…」(川という字)。

「私は向島に育った。向島は桜で、都鳥で、玉の井だけれど、…それらと同じくらい印象深いのが夏の蚊と秋の洪水だった。荒川の放水路が完成するまではきまって二百十日には出水の心配をさせられたのである」(二百十日初出文学界 1954.9)。

「風と雨と半鐘と、無事に済むか土手が切れるか、刻々にふえるあの恐れ…それがたうとう水になってしまふと、あとはそこいらちゆう不潔と貧乏と病氣いっぱいになる。毎年これだから…、隅田川の上はいつどれだけの雨だやら風だやら、はるか川下の言問付近で現在流れてゐる川の水を見たうへでやっと成り立せる周さんのかんであり父の予想であつてみれば、…土手の切れそうな場所はきまっていた。水の突きあたるところ、底にねぢれのあるところは毎年同じで、山谷がははいつも安全で、向島がはだけがいけない」(二百十日)…などなど。

「東京では隅田川は人に親しまれている川なのである。桜の名所ということが第一に云われ、梅若の話、いざ言と問わんの歌の、芝居では『三人吉三』や『髪結新三』など、年中行事では両国の川びらき。永井荷風先生の『すみだ川』、『澤東綺譚』で川はさらに親しまれたが、いまはろくな桜の木もないし、臭い水がどろんとして見るかげもない。…その泥濁りの急流のなかに翻弄されきて流れ来るのは、家具や造作の類である」(川の家具)。

以上は戦後の様子を記した場面であるが、「蓮池のふるさと」(ふるさと隅田川所収 初出 1953.5 合同教育新聞社)では、「私が小学校を出たのは大正六年(13歳)だから…村の小学校で東京とはいのもの隅田川の向こうへ越したいなかでしたから、…この辺一帯に染物屋が多かったので、…学校裏にも染め物工場があつて、…」とあり、その頃の隅田川はきれいな川であったことが思われる。

明治43(1910)年に大洪水があり、6歳だった文は弟と共に叔母幸田延のもとに預けられている。

「父は、やがて隅田川はくさる、といっていたのだが、…。岩淵の水門で水を堰くプランに、もっと丁寧な考慮が払われないかぎり、川はさきゆき腐る、といまいましげにいっていたのだが…」(用という字)。

幸田文は父露伴より家事、身辺にわたりきびしい躰をうけた(ちくま文庫ふるさと隅田川の作者紹介文より)。

隅田川に対する思いも父露伴の薰陶なくしては得られないものだろう。

幸田露伴は「水の東京」(文学で探検する隅田川所収 かのう書房 昭和62)で、「東京の水を談らんには隅田川を挙げて語らんこそ實に便宜多からめ。蓋し水の東京に於けるの綱なり、衣におけるの領なり。…東京の水を説かんとして、先ず隅田川を説くは、例えは猶水経の百川を説かんとして先ず黄河を説くが如し…」として隅田川の上流である荒川から説きおこし、さらながら名所案内の如く隅田川両岸をことこまかく観察しつつ下って東京湾に至っている。

幸田文によって奏でられる父露伴への追慕の情は心打つものである。

葛飾北斎と谷文晁と 三代目尾上菊五郎について

代 田 照 彦

最近講談というものは聞く機会がないが、講談師・神田伯治氏が演じた「北斎と文晁」を聞いたところ、浅草・伝法院、旧猿若町、と三人の菩提寺が私の住んでいる台東区にあることを知り、この題材について自分なりにまとめてみたので参考にしてください。

徳川十一代将軍家斉公は絵好きの將軍で有名で、ある時放鷹の途次、当時江戸で評判の高い文人画家・谷文晁と浮世絵師・葛飾北斎の二人を浅草伝法院に召し出した。白河藩主松平定信の家臣でもあった文晁の方は、おそらく身分や格式が高いという理由から先に描いた後、おもむろに北斎も將軍の前に立ち現れた。落ち着いて恐れる気配

もなく花鳥画や山水画を披露した。その後に、貼り継いだ紙を横に広げ刷毛にあい色の絵の具をつけて長く引いて、そして用意をしていた鶴を籠から取り出し、その脚の裏に朱肉をつけて紙の上に放ち足跡のしるしを赤く付けさせた。そして「紅葉で名高い龍田川の風景でございます」と申し上げ拝礼して下がったという。

そばに控えていた文晁は、はらはらと氣をもんで手に汗を握ったといううそのような話だが、文晁自身の語る実話として引用されているのだからまんざら作り話でもないと『葛飾北斎伝』に書かれている。またこれにより北斎と文晁はなお一層の親しみができ、次のようなことが語られている。

ある日、菊五郎が北斎の自宅を訪ねたところ、あまりにも雑然としていたため、菊五郎が駕籠の中の毛せんを使いの者に持ってきて敷かせたが、二人共初対面からお互いにけんか腰となり、別れてしまう。後日文晁が北斎の自宅に訪ね自分が紹介をし貴殿に怪談狂言の幽霊のつくりものがいつも同じでは面白くないので、変わったよい工夫で幽霊の絵を描いてもらいたくて紹介をしたこと。このため文晁は仲直りをさせるため、その年の年末に山谷・八百膳で三人はわだかまりなく浮世話をしながら除夜の鐘を聞き家路についた。そして正月の三日に初日を迎える、北斎にも案内状が来たが手元に資金もなく、やむなく肩屋に夜具・火鉢等を売り二分の金を持って河原崎座におもむいた。しかし寒中の時期、本人は風邪をひき寝込む。これを知った文晁は門人の相模屋の娘しげ「春香」に茶会を開かせ余興に自分と北斎の描いた絵を客人に譲り各々応分の金を包み文晁に差し出し、中でも菊五郎は一番多く置いて帰ったそうで、そしてそのお金を全部北斎に渡した。その時の文晁の目には涙が光っており北斎もこの友情にむくいるほかなかつたとのこと。北斎は八十余年の生涯を通じ、この時ほど厚い友情を感じ、文晁は素直に他人の心入れを受け取る北斎を見た

ことがないと言ったとのことである。

この三代目菊五郎と北斎については、またこのような逸話があったそうだ。この菊五郎は大変な美男子で人気絶大であるので北斎に絵姿を美しく描いてもらおうと頼みにいったがあんまり威張っているので、へそまがりの北斎は菊五郎が廁に入っている絵を描いて届けたというのはフィクションだろうが、それだけ菊五郎は美男子であったようだ。なお、この菊五郎が舞い納め後、猿若三丁目の自宅に餅屋を開き、すべて「菊」と「梅」にちなんだ「菊の葉餅、菊の柏餅、むろの梅、紅梅しんこ、初音まんじゅう、宿の梅」という新製品を商い、「菊屋万平」と称した。またこういう餅屋は天保12(1841)年1月道頓堀角の芝居に菊五郎が出演した折、この角の隣に出していたことがあるので、菊五郎は前々から餅屋の開店は考えていたようだ。しかし舞台をやめられず大川橋蔵と改め、嘉永元(1848)年4月名古屋若宮芝居に出演した。翌2年4月江戸に戻る途中、掛川宿で死去、65歳であった。

〔菩提寺〕

葛飾北斎：台東区・元浅草4-6 誓教寺。宝暦10(1760)年9月23日生。嘉永2(1849)年4月18日没・90歳。

谷文晁：台東区・東上野6-19 源空寺。宝暦13(1763)年9月9日生。天保11(1840)年12月14日没・78歳。

尾上菊五郎：台東区・今戸2-4-2 広楽寺。天明4(1784)年生(月日不明)。嘉永2(1849)年4月24日没・65歳。

〔『徳川実記』による鷹狩りの記録〕

- (1) 天保元年12月6日 三河島に
- (2) 天保2年4月27日 駒場野に
- (3) 同年10月27日 王子に
- (4) 同年11月6日 駒場野に
- (5) 同年11月18日 亀有に
- (6) 天保3年5月3日 橋場に
- (7) 天保7年4月9日 羅漢寺に
- (8) 同年7月15日 大川のほとりに
- (9) 同年10月3日 染井に

〔参考資料〕

- (1) 岩波文庫『葛飾北斎伝』飯島虚心著
- (2) 『葛飾北斎年譜』永田遺生慈著
- (3) 『浅草猿若町を知る』猿若町会
- (4) 『歌舞伎人名辞典』
- (5) 『徳川実記』(天保年間を主に)
- (6) 『浅草寺日記』(天保年間を主に記載?)
- (7) 『三代目尾上菊五郎』岩沙慎一著

日本髪について

国定美津子

昨年9月に、青森三内丸山遺跡の「板状土偶」を参考に推定し描かれた「三内丸山の女」パネル絵を私がスケッチして本誌に掲載していただきました。そのとき髪型のことが気になり、日本髪のルーツなどを調べてみたら、いろんなことが分かり、今度はそれを絵にしてみたくなりました。気がついたら、弥生結髪から昭和巻髪まで32枚になっていました。以下はその一部ですが、特に江戸時代のものを紹介します。



一度は八王子城へ

原 盛 年

八王子城は平成18年2月に東京都では江戸城と並んで日本100名城に認定されました。同21年には私は10回登っていますが、2000回以上も登った人もいます。登るたびに新しい発見があり、城滅亡の歴史を知れば知るほど興味がわいてきます。北条氏照が築城し、天正18(1590)年6月23日の未明に、前田利家と上杉景勝の軍勢2万~3万が老将横地監物、中山勘解由、金子三郎家重、狩野一庵、近藤出羽が率いる1300人が守る城を攻め壮絶な戦いをしましたが、多勢に無勢、半日で全滅という惨劇に落城しました。しかし、攻める方も鳥獣の住む峻険な山城のために死人が多かったという資料が残っております。小田原に詰めていた氏照、氏政は切腹し、翌年1月に徳川家康が江戸城に入城し、新しい時代の幕開けを作った最後の山城です。全員死亡という惨状の山城ですから、地元の人が寄り付かず、化身

が出るという噂もあり、その後、江戸幕府の領地となり、大久保長安、江川太郎左衛門の代官が管轄し、国指定史跡となったことで開発が遅れ、ようやく昭和の終わりから平成の初めにかけて一部が復元されました。曳橋は見事で、御主殿に入る虎口は上に行くほど約90cm広く作られて遠く感じられます。高尾山と並んで植物の宝庫ですし、なんと八王子神社は本丸にあります。関八州が見渡せ、建設中のスカイツリーも見えます。特に冬の澄んだ時の景色は見事です。高尾山にはない冬イチゴ、シダ類の宝庫ですし、董、椿、梅、桜、鬼女蘭、采配蘭、冬わらび等季節を楽しませてくれます。それにオオタカの生息地、タヌキの糞も時々見かけます。信長に鷹を送って交流し安土城を模した個所もあるといわれております。標高460mの本丸には井戸もあり(残念ながら圈央道開発で枯れています)、春から夏にかけてはウグイスがしきりに鳴き、高千穂蛇も住み、逆転層といって麓より暖かいために梅は1月から咲き始めます。2月は椿が真っ盛りです。400年以上たった石垣も



▲雪に埋もれる八王子城曳橋

残り、とにかく魅力ある探索の山城です。発掘跡からペネチアのガラス器、中国明代の磁器がたくさん出て、後北条の栄華がしのばれます(郷土資料館)。JR高尾駅北口①バス停から3つ目の霊園前で下車左折すればもう管理事務所があります。途中枝垂れ桜(3月彼岸頃)もあり、氏照のお墓も御参りしてください。

古戦場

原 盛人

斜崎や氏照飲し井戸涸れる
もののふの化身やさくら真白なり
老鷹の哀し哀しつ啼きにけり
累累と古城の跡に椿落つ
雪煙り老杉にたつ古戦場

友の会創立10周年記念事業 第5弾! 「会員が選ぶ東京新百景」応募総数559点(74名) 多数のご応募ありがとうございました!

「会員が選ぶ東京新百景」に多数ご応募いただきありがとうございました。2月末に最初の募集チラシを配布してから締切りまでちょうど5ヶ月。目標(目安)は100名の300点でしたので、応募人数こそ達しませんでしたが、作品数は559点と目標を大きく超えるに至りました。作品を応募された会員の皆さんに心よりお礼申しあげます。

作品の撮影場所は、23区をはじめ38地域にわたっています。もっとも多く多くの作品が寄せられました千代田区(江戸城跡、他)をはじめ八王子市や青梅市まで、かなり広い地域が対象になりました。これから第1次審査

(下記)で百景(入選作品)を選び、さらに第2次審査ではこの中から入賞作品10点を選びます。そして、11月2日~7日までJR両国駅構内で「東京新百景」の展示会を開催する予定です。

入選・入賞作品の発表は次号『えど友』(58号、11月1日)に掲載しますので、楽しみにお待ちください。

「会員が選ぶ東京新百景」 の 1次審査が迫ってまいりました!

先に公募しました審査委員に60名の会員の皆さんから申込みがありました。どうもありがとうございました。

上記のように、数多くの作品のご応募がありましたので、会場、時間帯に下記のように変更があります。ご注意ください。

日時:9月24日(金) 10時~17時

25日(土) 10時~12時

場所:江戸博・1階 学習室1・2

24日、25日のどちらかでご都合のつく時間にお立ち寄りください。応募作品の中から、あなたのお好きな作品を10点選んでください。なお、審査の申込みをされてない会員でも、時間帯の変更により審査可能となった方は、当日受付までお申し出ください。それではよろしくお願ひいたします。

【崇徳院】



恋患を題材にした噺です。店の熊さんが、御店の旦那に呼び出されます。聞くと若旦那が寝込んでしまい、医者に診てもらうと氣鬱という病とのこと、腹に思っていることを聞き出してほしいと、頼まれます。そこで熊さんは若旦那を見舞い、20日ほど前に上野の清水さんへ参詣の折、立ち寄った茶店で出会ったお嬢さんに恋患有していることがわかります。その時にお嬢さんが手渡してくれた短冊に「瀬をはやみ岩にせかるる滝川の」と書いてあったといいます。このことを、旦那に話すと、早速そのお嬢さんを探し出してくれと頼まれます。

これが噺の発端で、熊さんの捜査活動が始まるのですが、人の集まりそうな湯屋を18軒、床屋を36軒回ってふらふらになり、37軒目の床屋でお嬢さんの家族に頼まれて若旦那を捜している鳶頭(とびかしら)に出会います。そして、熊さんと鳶頭とのやり取りから、噺のオチへと繋がります。

ですが、噺には熊さんは、どの辺りの町を探し回ったのかは出てきません。そこで今回は、清水観音堂にちなみ上野近辺(=入谷から湯島天神まで)を歩いてみます。

入谷

東京メトロ・日比谷線の入谷駅の



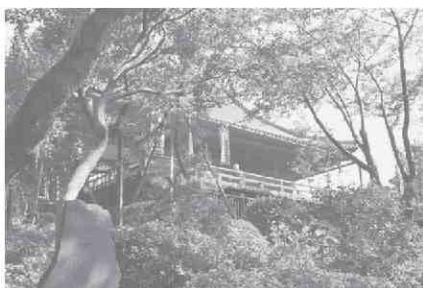
▲入谷朝顔発祥之地

1、2番出口を上ると日光街道で、言問通りとの交差点が“入谷”です。この交差点の西側の角に「入谷朝顔発祥之地」と刻まれた碑、その隣に「入谷乾山窯元之碑」が建っています。ここを言問通りに沿ってチョット行くと、通りの左側に眞源寺(江戸期は眞源院鬼子母神)があります。「恐れ入谷の鬼子母神」で知られるお寺です。現在、この部分だけが膾炙されますが、その全体は「恐れ入谷の鬼子母神、びっくり下谷の広徳寺、どうぞ有馬の水天宮、志やれの内のお祖師様、うそを築地の御門跡」という馴熟洒落だそうです。

この通りを日暮里方向に歩き“駅下”的信号を左折して上野公園の方向に進みます。そして、若旦那とお嬢さんが参詣した清水堂に向かいます。

上野清水観音堂

ここ清水堂の周りは、今でも当時の風情をわずかに残しているに違いありません。若旦那が上野の清水さんを参詣したと話したとき、熊さんは次のように語ります。



▲清水観音堂

「いいことをしましたねエ『信あれば徳あり』と言つてね。あのまた清水堂てえのが高台だから見晴らしがいいやね。えエ。下に弁天様の池が見えるし、向ヶ岡、湯島の天神、神田の明神、左の方はてえと、聖天の森から待乳山が……言うところは無えね。……」

ですが、不忍池の景色が見えるのは冬場の木が枯れている時だけで、葉が茂ると、手前の木立が屏風になって何も見えません。わずかに見えるのは、不忍池の正面に向こうの積み木細工を重ねたような風変わりなビルだけです。また、「…神田明神、左の方には聖天の森から待乳山が見える」と言っていますが、神田明神はここからでは見え



▲湯島天満宮

ません。また、聖天の森や待乳山は真後ろですから、やはり見えなかつたはずですが…。清水堂脇の階段を下り、不忍池の辺を左へ進みます。そして、“池之端一丁目”的交差点に出ます。ここを南に歩きます。すると春日通りと交叉する“天神下”となります。ここを渡って、次の交差点(無名です)を右に入ります。

湯島天神

すると正面に石段が見えます。天神石坂(天神男坂)と言われるもので、38段あります。ここを登ると天神様本殿の横手に出ます。通称湯島天神。正式名称は、湯島天満宮。平成12年3月31日に旧称湯島神社から変更したことです。古くから江戸・東京の代表的な天神様で、特に受験シーズンには多数の受験生が参拝に訪れます。普段から学問成就や修学旅行の学生たちでにぎわいを見せています。希望校への合格や学問成就の願いを込めた絵馬札が山のようにならねられています。

携帯電話を片時も手放せない当世の若者にとって“忍ぶ恋患”や“百人一首”などは、死語の世界のことになってしまい古典が庶民にも共通の教養であった頃の噺は、次第に通じにくくなっているのかも知れません。この歌の下の句は、「われても末にあはむとぞ思ふ」で、百人一首の第77番目にある、代表的な恋歌です。

百人一首の中で、上の句が「せ」で始まるのはこの歌だけで、「む、す、め、ふ、さ、ほ、せ」と称する一枚札の一つです。でもこんなことを聞かされても、“それって、どういうこと！”ですかね。

【取材】歩いた人(文・写真)：

広報部会・岡田守弘

イラストを描いた人：同・松原良

催事案内

古文書講座

9月から第2期を開講

すでに申込は締切っておりますが、9月から下記日程で第2期を開講します。

◆入門編

- ・講師：小松賢司さん（学習院大学大学院史学専攻）
- ・開催日：9月8日（水）、10月6日（水）、11月10日（水）

◆初級編

- ・講師：田中潤さん（学習院大学大学院史学専攻）
- ・開催日：9月15日（水）、10月20日（水）、11月17日（水）

◆中級編

- ・講師：長坂良宏さん（学習院大学大学院史学専攻）
- ・開催日：9月18日（土）、10月9日（土）、11月6日（土）

◆時間：各講座とも

A 講座は10時30分～12時30分、

P 講座は14時～16時

◆会場：各講座とも江戸博1階会議室または学習室1,2

◆参加費：各講座とも全3回1,500円（初回一括払い）

【企画担当責任者】上田太一（事業部会）

友の会特別観覧会

友の会 創立10周年 記念事業 第4弾！

●特別展「隅田川

～江戸が愛した風景～

◆江戸博が20年以上かけて収集してきた隅田川の絵が初めて一挙に公開されるとともに、他に所蔵されている名品とあわせて、描かれた隅田川の多彩な世界が展開されます。描かれた隅田川を通じて、江戸の文化や生活の中に根ざした隅田川というものを再確認したいものです。隅田川の絵が、これほどの規模で集まるのはおそらく初めてのことです。この機会に、ぜひ江戸の象徴のひとつである隅田川の絵を堪能しましょう。担当の我妻直美学芸員による「見どころ解説」をお願いしていますので、ご期待ください。

（本号の1ページもご参照ください）

- ・開催日：9月24日（金）17時～19時
- ・申込締切：9月14日（火）必着
- ・会場：江戸東京博物館・1階ホール／企画展示室
- ・定員：200名 同伴者可（はがきに氏名連記）
- ・参加費：会員、同伴者とも無料（10周年記念事業のため）

【企画担当責任者】松原良（事業部会）

友の会セミナー

第97回「龍馬を継いだ男 岩崎弥太郎」

講師 安藤優一郎さん（歴史家・文学博士）

◆夢半ばで、不慮の死をとげた龍馬の遺志を受け継ぎ、世界の三菱を創った岩崎弥太郎。龍馬のつくった海援隊を支え、優れた国際感覚と交渉術で近代ビジネスの扉を開いた男岩崎弥太郎について、その実像をお話していただきます。

○講師略歴：あんどう・ゆういちろう

昭和40(1965)年生まれ。早稲田大学教育学部大学院卒、文学博士。江戸をテーマとした執筆、講演活動を精力的に行っている。著書は『幕末維新消された歴史』、『大名庭園を楽しむ』、『お江戸お寺繁昌記』、など多数。

◆開催日時：9月25日（土）14時～15時30分

◆申込締切：9月14日（火）必着

◆会場：江戸東京博物館・1階ホール

◆定員：200名 同伴者可（はがきに氏名連記）

◆参加費：会員 500円・同伴者 600円（当日払い）

【企画担当責任者】藤村武雄（事業部会）

第98回「江戸庶民の生活と広場の賑わい」

講師 小林信也さん（川村学園女子大学講師・文学博士）

◆江戸の各所にあった広場の多くでは、たくさん露店が出てにぎわいをみせていたことは、江戸の都市風景を描いた絵画史料などによってよく知られています。今回も、まずは、そんな絵画史料を楽しく“解読”しながら、江戸の広場へとタイムトラベルをしてみましょう。しかし、そんな広場を活動の舞台とした江戸の民衆の暮らしぶりは、意外と知られていません。絵画史料につづけて、そんな民衆の生活ぶりを生き生きとつづった文献史料をていねいに読み込むことで、彼ら彼女らと同じ目線にたって、江戸の広場のにぎわいを眺めてみましょう。きっと新たな江戸の姿が見えてくると思います。

○講師略歴：こばやし・しんや

昭和39(1964)年福山市生まれ。平成9年東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学。東京大学文学博士。江戸・東京を主なフィールドとする都市史を対象に江戸町人社会を研究テーマとし、主に露天市場に関心を持っている。現在、東京都公文書館専門史料編纂員。川村学園女子大学講師。著書：『江戸の民衆世界と近代化』（山川出版社）

◆開催日時：10月23日（土）14時～15時30分

◆申込締切：10月12日（火）必着

◆会場：江戸東京博物館・1階ホール

◆定員：200名 同伴者可（はがきに氏名連記）

◆参加費：会員 500円・同伴者 600円（当日払い）

【企画担当責任者】清水昌紘（事業部会）

見学会

「広重『名所江戸百景』周辺探訪 —その3(両国橋上流隅田川周辺)」

◆広重『名所江戸百景』は安政期江戸の四季の風景、風俗などをこまやかに描いた作品です。この企画では広重が描いたと思われる場所とその周辺を探訪し、今の街の姿のなかに江戸時代の風景、背景を思い浮かべ、そこに吹く風や情景を少しでも感じていただこうとするものです。今回は両国橋～藏前橋～吾妻橋～言問橋まで歩きます。江戸時代、隅田川には情緒ある木の橋が架かり、夏の夜には花火が空に華ひらき、屋形船の三味線の音、猪牙船の船頭の威勢のいい声がありました。今でも、川面をわたる涼風は頬をなでて通り過ぎていきます。所要時間は約3時間半、建設中のスカイツリーを見ながら、京成線業平橋駅での解散となります。

【今回訪ねる広重の作品】『両国橋大川ばた』『両国花火』『浅草川首尾の松御厩河岸』『御厩河岸』『駒形堂吾嬬橋』『吾妻橋金龍山遠望』『待乳山山谷堀夜景』

●開催日：10月3日(日)12時45分集合

集まり次第、時間前でも順次出発します。

●集合場所：JR両国駅国技館側改札出口

●申込締切：9月21日(火)必着

●定員：100名 同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)

●参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】山本隆(事業部会)

「房総のむら見学と歴史体験」(バスツアー)

◆今回は、アンケートで皆さんの要望の多かった「房総のむら」の歴史体験です。主に江戸時代後期から明治初期の房総の商家・武家屋敷・農家などが当時の景観・環境を含めて自然の里山の中に再現され、実演を見たり来館者自らが体験できる博物館です。半日、ゆったりと楽しめるように企画しました。この町並みは、たびたびテレビドラマのロケ地にもなっています。16時30分ごろ江戸博帰着予定。

●博物館内は原則「自由散策」。昼食は各自館内の食堂等を利用(昼食代は各自負担、森の中に格安で素敵なレストランがあります。弁当持参も可)

●開催日：10月16日(土)7時30分集合、8時出発

●集合場所：江戸博北側入口 レストラン前

●申込締切：9月9日(木)必着

●定員：120名(バス3台) 同伴者1名可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)、申込多数の場合は抽選

●参加費：会員4,000円、同伴者4,500円。参加費は前納(参加申込者に振込先と期限を通知します)。

【企画担当責任者】岩松精(事業部会)・末永俊幸(同)

会員優待のお知らせ

●特別展

好評開催中!

「大昆虫博」

会期 2010年6月22日(火)～9月5日(日)

休館日：毎週月曜日

会員：一般 650円、65歳以上 320円、大・専門生520円

同伴者：一般1,040円、65歳以上 520円、大・専門生830円

*小学生、中学生、高校生は65歳以上と同じ

次回予告

●特別展

「隅田川～江戸が愛した風景～」

会期 2010年9月22日(水)～11月14日(日)

休館日：毎週月曜日、ただし10月11日(月・祝)は開館、

10月12日(火)は休館

会員：一般 550円、65歳以上 270円、大・専門生440円

同伴者：一般 880円、65歳以上 440円、大・専門生700円

*小学生、中学生、高校生は65歳以上と同じ

企画展のご案内

●企画展

好評開催中!

「東京復興

—カラーで見る昭和20年代東京の軌跡—」

会期 2010年8月4日(水)～9月26日(日)

会場 常設展示室5階 第2企画展示室

●次回企画展

「御三卿ってなに?」(仮称)

会期 2010年10月5日(火)～11月14日(日)

会場 常設展示室5階 第2企画展示室

の会事務局へ。

「往復はがき」の必要はありません。

なお、見学会に限り傷害保険の関係で同伴者の氏名、住所、電話番号も書いてください。

◆締切：各催事の案内をご覧ください。

◆申込は、各催事ごとに会員1人1通。

◆友の会へのご意見・ご要望があればご記入ください。

◆申込先：〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1

江戸東京博物館友の会事務局

*お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。

なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

*いざれも申込多数の場合は抽選となることがあります。

*「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の水曜日か金曜日(10時～12時、13時～17時)にお願いいたします。

*「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

お申込方法

*「えどはくカルチャー」など江戸博への申込と違い、普通はがきで宛先も「友の会事務局」と明記ください。お間違いなく！

◆普通はがきに、①催事名(略名可)・開催日、②会員番号、③氏名(同伴者連記)を明記して下記の「友

会報くえど友>第57号

平成22年9月1日発行(奇数月1日発行)

編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

編集長兼発行人：松原良(会長) 副編集長：菅沼和男
編集人：佐藤幸彦、岡田守弘、深尾恵美子、福島信一、松田悠美子、中里弘子、
内匠屋京子、笹川道央、秋尾暢宏、今野君江、鈴木進一、中村真子、原盛年、
藤原理子、佐藤美代子

発行：江戸東京博物館友の会

〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1 電話 03-3626-9910